

Weekly Michael's News

<今週の聖句>

2016年11月28日発行 No.23

『天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」』
(新約聖書 ルカによる福音書 第1章 28節)

<大きな喜びを胸に…。クリスマスの準備を行う降臨節（アドベント）に入りました!!>

11月も終わりが近づき2016年も残り少なくなりました。キリスト教の暦でも、今週からクリスマスを待ち望みつつ必要な準備を行うアドベント（＝降臨節、待降節とも言います）が始まりました!! 「アドベント」とは「到来」を意味するラテン語「アドベントゥス」から来た言葉で、救世主がこの世にいられた事を表しています。キリスト教センターでも来週7日（水）のクリスマス礼拝に向けて、下の写真のように様々な準備が行われています。

特筆すべきは、チャペル入口左側に設置された鐘の存在でしょう!! 本場オランダで作られた青銅製のこの鐘、厚さは5cm!! 重さはなんと30kg以上!! しかし、紐を引っ張ってスイングさせると、見た目の重厚さとはまた違った高く美しい音色を響かせてくれます。カトリック教会では、クリスマス物語として有名な「受胎告知」（天使が母マリアへ懐妊を知らせた）、これを覚えて教会の鐘を毎日3度鳴らす習慣「聖アンジェラスの鐘」がありますが、KIUチャペルでもこのアドベントから、お昼の礼拝前にこの鐘を鳴らし、大学構内に祝福の時をお知らせしたいと思います!! なお、11月30日（水）11時30分から、前田理事長の司式で、この鐘を感謝する「聖鐘祝福・奉献式」を行います。時間の許す方はぜひチャペル前にお集まり頂き、新しい伝統の始まりに加わっていただければ幸いです。



本場英国から聖歌隊用のガウンが到着!! 本番が楽しみ!!



職員の聖歌練習もスタート!!



赤ちゃんイエスの笑顔がステキw



鐘の重さ30kg以上!! 3人がかりで持ち上げて… 設置完了!! (^o^)



<先週のメッセージ>

※ここでは実際に話されたお話の要約を掲載しています

11月21日(月) 前田 次郎(理事長)

テーマ「生きている神」

聖書は、個人の執筆や編集など様々な形の文書があるが、そこには猛烈な「真実」が存在する。それは「神は生きている」というメッセージであり、これを「何としても後世に伝えなければならない」という熱心さや祈りが聖書を作り上げたと言っても過言ではない。他の小説や論文のように理論や理屈ではなく、嫌われた者・悲しむ人と共に歩むイエス、そのイエスの中に光る神の愛が今日においても聖書から伝わってくる。今も生きておられる神は、私たちの隣におり、私たちを守ってくれている。「あしあと」の詩にあるよう、苦しむ私を背負って歩いて下さるのだ。

11月22日(火)

この日は、音楽礼拝でした!! クリスマスが近づいてくる中で聖歌隊の奉唱が行われました!!



11月23日(水) 西畑 賢治(経済学部) テーマ:「スポーツマンシップとフェアプレイ」

勤続30年を迎え、この大学で様々なスポーツに携わりながら感じた事の一つに、「スポーツマンシップとフェアプレイ」の大切さがある。試合中の対戦相手は、「自分のプレーを邪魔する敵」ではなく「お互いを高め合うパートナー」である。だからこそ、相手の存在や審判の判断を根本的な所から尊重する「スポーツマンシップ」と、公正なスタートに準ずる「フェアプレイ精神」が求められる。オリンピックや全国大会は、結果的に参加者のほとんどが敗者になるが、取り組みの一つひとつに対して真剣になるからこそ、意味がある。「勝って奢らず、負けて腐らず」。これはスポーツだけでなく、人生においても大切な姿勢を与えてくれるように思う。

11月24日(木) 野間 光顕(チャプレン)

テーマ:「あなたの抱える痛みと共に」

礼拝に欠かせない要素である「聖書」。ここには約三千年前の物語や伝説、諺や詩、歴史や手紙など、多様な文章が世界中の人々に影響を与えている。礼拝では、「聖書日課」により読む箇所が定められている。不思議な事に、ここで読まれる言葉が、時々自分の状況にピタッと当てはまる事がある。先日の礼拝では、クリスマスの前にイエスの十字架の物語が読まれた。なぜか?そこには栄光のキリストではなく、苦しむ人と共に苦しみ、泣く者と共に泣くイエスの姿があった。これこそ、苦しみや不安を抱えての生活を余儀なくされている一人ひとりへの喜びのメッセージなのだと思う。先の見えない不安に包まれている今こそ真のクリスマスの意味を覚えたい。

11月25日(金) 服部 七郎(職員)

テーマ:「ユデガエル ～変化への対応について～」

ヤカンを二つ用意し、一方に熱湯を、片方には常温の水を入れ徐々に熱していく。熱湯の入ったヤカンにカエルを入れると、カエルは熱いので飛び跳ねて逃げる。しかし常温の水に入ったカエルは、徐々に温度が上昇し熱湯になっても動こうとせず、つまり周囲の環境の変化に気づかず、結果ユデガエルになってしまう。急激な環境の変化、自然ではそれを天災と、人間社会では革命や維新と呼ぶが、我々を取り巻く全ての環境は、ゆっくりと、そして確実に変化している。19世紀の生物学者ダーウィンは「種の起源」という本の中で「強い者が生き残るのではない。賢い者が生き残るのでもない。環境の変化に適応できた者が生き残るのである。」という言葉を残す。ゆっくりと、そして必ず変化していく我々を取り巻く環境、この変化にいかに対応、適応していくかは、誰にとっても真剣に取り組むべき最重要の課題なのだ。

(文責:野間 光顕)